

高齢女性のドメスティック・バイオレンスの認識と 予防啓発に関する意見

須賀朋子¹⁾, 森田展彰²⁾, 斎藤 環²⁾

【目的】 高齢のドメスティック・バイオレンス(以下、DV)被害女性と、非被害女性にDVの知識、DVの特徴に関する理解、意見、学習経験と、現在の心身状態に違いがあるかを比較する。

【方法】 60歳以上のDV被害女性14名と、非被害女性72名にDVの知識、DVの特徴に関する理解、意見、学習経験と、現在の心身状態と心境の比較の横断的調査を行った。

【結果】 高齢女性は被害経験の有無に関らず、中学・高校生への予防啓発に肯定的であることが明らかとなった。

「DVに関する学習経験」では、被害女性は非被害女性と比べて、学習経験が高いことが示された。また「DVの特徴に関する理解」でも、被害女性は「DV加害者が暴力という方法を選んでいること」、「DV加害者は暴力を振ったあと謝るが再び暴力を振ることが多いこと」を非被害女性と比べて高く認識をしていることが明らかとなった。

【結論】 高齢女性は、若者へのDV予防には、被害経験の有無に関らず賛成意見が多いが、学習経験においては、被害者は非被害者に比べて有意に高いことが示された。このことから、高齢女性はDV被害に遭ってはじめて詳しく学習を始める状況が考えられた。

キーワード：ドメスティック・バイオレンス， 高齢女性， 被害経験， 予防

¹⁾ 筑波大学大学院人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻

²⁾ 筑波大学医学医療系

I. 緒言

我が国ではドメスティック・バイオレンス（以下、DV）とは「配偶者や恋人など、親密な関係にある、または、あった者から振られる暴力¹⁾」のことをいう。日本では1995年の第4回国連世界女性会議（北京）以降、女性に対する暴力への関心が広まった²⁾。DV防止法が施行されたのは2001年10月³⁾で、この12年間でDVという言葉は広く知られるようになった。

これまでの報告からDVの特性をみると2012年に内閣府⁴⁾が実施した「男女間における暴力に関する調査」では、女性の10人に1人が配偶者や恋人などから何度も暴力を受けたことがあると回答している。この調査の被害女性の年代層をみると、20代女性は67人中10人（14.5%）、30代は196人中16人（8.1%）、40代は252人中31人（12.3%）、50代は272人中23人（8.5%）、60歳以上は616人中69人（11.2%）であった。

上記の調査の高齢被害女性69人のうち、28人は「命の危険を感じたことがある」と回答しているにも関わらず、誰かに相談をしたことがある女性は22人で、相談をしなかった女性は17人、無回答30人であった。相談をしなかった理由として7人が「自分が我慢をすればやっていけると思った」、4人が「相談をしても無駄だと思った」、3人が「恥ずかしくて誰にも言えなかった」と回答している。また別れなかった理由として47人が「子供がいるから」、17人が「経済的不安」、3人が「世間体が悪い」、2人が「相手には自分が必要」と回答した。

海外の最新の研究ではポーランドのTobiaszら⁵⁾が、高齢者のDV問題を高齢者虐待と捉え、子供から親に向かう暴力も含めてすべての家庭内で起こる暴力をDVとして分析を行っている。この研究では社会から孤立感を感じている高齢者が被害者になりやすいことを論じている。

日本ではDVに関する論文が少なく、高齢女性のみを対象としたDVの論文はみられない。この背景には上記の内閣府の調査⁴⁾で示されているように被害女性が我慢を続け

ていることが影響し、現状を明らかにすることが難しくなっていることが考えられる。高齢者が増え続けている日本では今も配偶者から暴力を受け続けている高齢女性が多く存在していることは否めない。

本研究ではDV被害者で別居から1年から20年の期間が過ぎた60歳以上の高齢女性14名と、非被害高齢女性72名の、「DVの知識」、「DVの特徴に関する理解」、「DV予防についての意見」、「DVに関する学習経験」、「現在の心身状態と心境」の比較を行う。これらの項目の、高齢のDV被害女性と非被害女性の、DVの知識、理解、意見、学習経験と現在の心身状態と心境を明らかにする。

II. 研究方法

1. 対象者

60歳以上のDV被害経験がある女性14名（都内にあるDV相談機関のうち協力を得られた3か所の相談機関のいずれかに来ている女性）と、被害経験がない関東地方に在住の60歳以上の女性72名に機縁法でDVに関する横断的質問紙調査を行った。

本研究のDV被害者とは、配偶者・元配偶者・恋人・元恋人から暴力を受けた経験がある60歳以上の高齢女性のことを指す。

了解が得られた高齢者に質問紙を1枚ずつ手渡しで配布し、無記名で封筒に入れて密封回収、または返信用封筒（個人が特定できないように無記名）による郵送法で回収を行った。

2. 質問紙の内容

「DVの知識」では、「1.DVという言葉を知っている」、「2.DVとはどういうものなのか知っている」の2項目を尋ねた。

「DVの特徴に関する理解」では、「1.DVは相手とのケンカが原因でおこる（逆転）」、「2.女性から男性への暴力はDVではない（逆転）」、「3.DVは恋人同士などの間でも起こる」、「4.DVは怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる」、「5.DVの本質は相手を支配することである」、「6.DV被害は身近で誰にでも起こりうることであ

る」、「7.DVの加害者は暴力を振るった後、謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い」の7項目を尋ねた。

「DV予防についての意見」では、「1.DV予防の授業を中学生や高校生の時に受けてみたかった」、「2.DV予防を中学や高校の授業の中で実施した方が良い」の2項目を尋ねた。

「DVの知識」、「DVの特徴に関する理解」、「DV予防についての意見」は4件法で回答を1つ求め、「あてはまる4点」「少しあてはまる3点」「あまりあてはまらない2点」「あてはまらない1点」で平均値得点を算出した。

「DVに関する学習経験」では、「1.DVに関する授業や講習を受けたことがありますか」、「2.DVに関する勉強（本などで調べる）をしたことがありますか」の2項目を、2件法[ある・なし]で回答を1つ求め「ある1点」、「ない0点」で平均値得点を算出した。

「現在の心身状態と心境」では、「1.あなたは今、自分をどのくらい大切に思いますか」、「2.あなたは今、周りの人をどのくらい大切に思いますか」、「3.ここ数年、あなたは自分の生活にどの程度、満足していますか」、「4.あなたの原家族はあなたにとってどのくらい温かい家族ですか」の4項目を、0点から10点のビジュアルアナログスケールで尋ね、あてはまると思われる場所に×印をつけるように回答を求めた。尚、0点から10点の間で点数が高いほど心身状態と心境が良好であることを表している。

3. データの分析

被害女性と、非被害女性の「年齢」の比較はFisherの直接確率法、「DVの知識」、「DVの特徴に関する理解」、「DV予防についての意見」における平均値得点の比較は、正規分布をしていたので対応のないt検定で解析を行った。「DVに関する学習経験」の比較は χ^2 検定を行った。「現在の心身状況と心境」の平均値得点の比較も正規分布をしていたので対応のないt検定で解析を行った。

解析はIBM SPSS statistics 21.0を使用した。

4. 研究期間

2013年1月から9月に調査を実施した。

5. 倫理的配慮

研究を依頼する際には手渡しまたは郵送で行った。質問紙表紙で研究の趣旨の説明を行い質問紙に答えるか否かは自分の意思で決めて良いことを明記した。参加を辞退したことにより不利益を被ることのないこと、プライバシーの保護に細心の注意を払い無記名で封筒に入れて提出すること、提供されたデータは研究目的以外には使用しないことを明記した。

本研究は筑波大学医学医療系の倫理委員会第731号の承認を得て実施をした。

III. 結果

DV被害女性は14名に手渡しで配布し、14名から回答が得られた(回収率100%)。非被害女性は75名に手渡しで配布し、72名から回答が得られた(回収率96%)。

1. 対象者の属性 (表1)

被害女性14名の背景は都内にあるDV相談機関のうち協力を得られた3か所のいずれかの相談機関でケアを受けている女性たちである。年齢構成は14名全員が60代であった。職種においては非常勤職(非正規雇用、パートタイム)が5名、その他が9名であった。子供が「有」と回答した女性は13名、「無」と回答した女性は1名であった。別居後の年数においてはDV被害から逃げて別居後5年

表1.高齢対象者の基本属性

		DV被害		p値
		有 n=14	無 n=72	
年齢	60代	14	69	p<.001
	70代	0	3	
職種	主婦	0	41	
	非常勤(パートなど)	5	13	
	その他	9	18	
子供	有	13	57	
	無	1	15	
別居後の年数	5年以上	5		
	3年~5年未満	7		
	1年~3年未満	2		

Fisherの直接確率法

以上経過をしている女性が5名、3年以上5年未満が7名、1年以上3年未満が2名であった。

非被害女性72名の背景として年齢構成は3名が70代、69名が60代であった。職種においては主婦41名、非常勤職13名、その他18名であった。子供が「有」と回答した女性は57名、「無」と回答した女性は15名であった。

被害女性と非被害女性の年齢差の比較を行ったところ、非被害女性が、被害女性に比べて有意に高かった($p<.001$)。

2. DVの知識 (表2)

「1.DVという言葉を知っている」という質問では、被害女性の平均値得点が4.00 ±

0.00(平均値得点±標準偏差)で、全員がDVという言葉を知っている状況であった。非被害女性の平均値得点は3.73 ± 0.80であった。「2.DVとはどういうものなのか知っている」では、被害女性の平均値得点は3.92 ± 0.27で「少しあてはまる」と回答をした1名を除いて全員が「あてはまる」と答えていた。非被害女性の平均値得点は3.61 ± 0.84で、2つの質問ともに被害女性と、非被害女性の間で有意な平均値得点の差はみられなかった。

3. DVの特徴に関する理解 (表3)

「DVの特徴に関する理解」について被害女性と、非被害女性の間で比較を行ったところ「4.DVは怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる」、「7.DV

表2 DVの知識の比較

	被害ありn=14		被害なしn=72		p値
	平均	SD	平均	SD	
1. DVという言葉は知っている	4.00	±0.00	3.73	±0.80	n.s.
2. DVとはどういうものなのか知っている	3.92	±0.27	3.61	±0.84	n.s.

対応のない t 検定, 4点満点の平均値とSD, 「あてはまる4点、少しあてはまる3点、あまりあてはまらない2点、あてはまらない1点」

n.s.=not significant

表3 DVの特徴に関する理解

	被害ありn=14		被害なしn=72		p値
	平均	SD	平均	SD	
*1. DVとは相手とのケンカが原因で起こる	3.75	±0.62	3.41	±0.98	n.s.
2. DVは恋人同士などの間でも起こる	4.00	±0.00	3.63	±0.86	n.s.
*3. 女性から男性への暴力はDVではない	4.00	±0.00	3.65	±0.79	n.s.
4. DVは怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる	4.00	±0.00	3.10	±1.19	$p<.05$
5. DVの本質は相手を支配することである	4.00	±0.00	3.70	±0.69	n.s.
6. DV被害は身近で誰にでも起こりうる事である	3.58	±0.99	3.70	±0.60	n.s.
7. DVの加害者は暴力を振った後、謝る事もあるが再び暴力を振る事が多い	4.00	±0.00	3.92	±0.28	$p<.05$

対応のない t 検定, 4点満点の平均値とSD, 「あてはまる4点、少しあてはまる3点、あまりあてはまらない2点、あてはまらない1点」

n.s.=not significant

の加害者は暴力を振るった後、謝る事もあるが再び暴力を振る事が多い」で被害女性が、非被害女性に比べて平均値得点が有意に高かった (4. $p < .001$, 7. $p < .05$)。他の5項目では両者の間に有意な差はみられなかった。

4. DV 予防についての意見 (表 4)

「1.DV 予防の授業を中学・高校生の時に受けてみたかった」、「2.DV 予防の授業を中学や高校の授業の中で実施した方が良い」では、被害女性と非被害女性の間で平均値得点において有意な差はみられなかった。また2つの質問共に被害女性は全員が4点満点で、中学や高校の授業でDV 予防啓発を行った方が良いと思っていることが示された。

5. DV に関する学習経験 (表 5)

「1.DV の授業や講習の経験」、「2.DV の勉強(本など) の経験」について [ある・なし] で被害女性と、非被害女性の間で比較を行ったところ、被害女性は非被害女性に比べて有意に平均値得点が高く、授業や講習や本などの勉強を行っていることが示された。

6. 現在の心身状態と心境 (表 6)

0点から10点のビジュアルアナログスケールで尋ね、あてはまると思われる場所に×印をつけてもらったところ「1. あなたは今、自分のことをどのくらい大切に思いますか」、「2. あなたは今、周りの人のことをどのくらい大切に思いますか」、「3. ここ数年あなたは

表4 DV 予防についての意見

	被害ありn=14		被害なしn=72		p 値
	平均	SD	平均	SD	
1. DV 予防教育の授業を中学生や高校生の時に受けてみたかった	3.82	±0.40	3.76	±3.64	n.s.
2. DV 予防教育を中学や高校の授業の中で実施した方が良い	4.00	±0.00	3.61	±0.82	n.s.

対応のない t 検定, 4点満点の平均値とSD, 「あてはまる4点、少しあてはまる3点、あまりあてはまらない2点、あてはまらない1点」

n.s.=not significant

表5 DVに関する学習経験

	被害ありn=14		被害なしn=72		p 値
	平均	SD	平均	SD	
1. DVの授業や講習を受けた事があるか	0.71	±0.47	0.33	±0.47	$p < .01$,
2. DVの勉強(本など)をした事があるか	0.92	±0.27	0.38	±0.49	$p < .001$

χ^2 検定 数字は平均値得点{有1点、無0点}

表6 現在の心身状態と心境

	被害ありn=14		被害なしn=72		p 値
	平均	SD	平均	SD	
1. あなたは今、自分の事をどのくらい大切に思いますか	8.91	±1.72	8.80	±1.72	n.s.
2. あなたは今、周りの人のことをどのくらい大切に思いますか	8.67	±1.50	8.69	±2.00	n.s.
3. ここ数年、あなたは自分の生活に、どの程度、満足していますか	7.75	±2.30	7.44	±2.08	n.s.
4. あなたの原家族(生まれた家族)は、あなたにとってどのくらい温かい家族ですか	5.33	±3.39	8.18	±2.20	$p < .01$

対応のない t 検定, 10点満点の平均値とSD

n.s.=not significant

自分の生活にどの程度満足していますか」では被害女性と非被害女性の間で有意な平均値得点の差はみられなかった。

しかし「4. あなたの原家族(生まれた家族)は、あなたにとってどのくらい温かい家族ですか」という質問は、10点満点で被害女性の平均値得点は 5.33 ± 3.39 で、非被害女性の平均値得点は 8.18 ± 2.20 で、被害女性は非被害女性に比べて原家族を温かく感じる平均値得点が有意に低かった。

IV. 考察

本研究から60歳以上の高齢女性はDVの被害経験の有無に関わらず「DVとはどういうものなのか知っている」と回答した人は96%と高かった。須賀ら⁶⁾の中学・高校生を対象とした調査では、同質問で「知っている」と回答した中学生は29.7%、高校生は47.1%であった。このことから高齢女性は中学・高校生と比較して2倍から3倍のDVの知識を持ち得ている人が存在することが示された。中学・高校生は「DVの知識について知りたい」と多くの生徒が回答しているが、両親や学校の先生からは教えてもらう機会は少ないことが現状である¹⁾。長い人生経験を積み重ねた高齢女性が中学・高校生に正しい知識を語ることは大切なことで、特にDV被害女性が若い世代にDVの怖さについて語ることができれば、中学・高校生は真剣に耳を傾けると思われる。このような場面が多く自治体で行われていけば、若い世代への予防が可能となるであろう。

「DVの特徴に関する理解」では7項目中、2項目の「4.DVは怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる」、「7.DVの加害者は暴力を振った後、謝ることもあるが再び暴力を振ることが多い」で被害経験のある女性と被害経験のない女性との間に有意な差がみられた。この2項目については被害経験のある女性の全員が4点満点中4点であった。実体験があったからこそ認識が強くなる内容の項目であったと思われる。他の5項目においては「DVはケンカの延長でおこるものではないこと、恋人同士の間でも

起こること、男性も被害者になり得ること、DVの本質は相手を支配すること、身近で誰にでも起こり得ること」が内容に含まれており、広報誌などから知識を得ることが可能なため、被害経験の有無では有意な差がみられなかったと思われる。

DVの授業や本などの学習経験の有無では、被害女性と非被害女性の間で有意な差がみられた。高齢の被害者は被害に遭って初めて講習や本を通して学習し、回復をしていくための方法を模索するのであろう。高齢世代は学生時代にDVの授業や講習を受ける機会はなかったと考えられる。

DV予防についての意見では被害経験の有無に限らず、高い平均値得点で両者共に、学校でDV予防を行った方が良いという意見が多いことが明らかとなった。内閣府の調査⁴⁾でも「男女間の暴力を防止するために必要なことは何か(複数回答可)」という質問では、60歳以上の女性683人中、447人(65.4%)が「家庭で保護者が子どもに暴力防止の教育を行う」、444人(65.0%)が「被害者が早期に相談できる相談窓口を増やす」、398人(58.3%)が「学校で児童・生徒等に暴力防止教育を行う」と、学校現場でのDV予防のニーズが3番目に求められていたことから、本研究の高齢女性の「DV予防に関する意見」の結果と一致する。内閣府⁴⁾の同質問では、60歳以上の男性も1位は「家庭で保護者が子どもに暴力防止の教育を行う」を挙げている。しかし50代、40代、20代は男女共に1位に「被害者が早期に相談できる相談窓口を増やす」を挙げていた。30代のみが男女共に「加害者への罰則を強化する」が1位であった。「家庭で保護者が暴力防止の教育をしてほしい」という考えは60歳以上の高齢者共通の特徴的な願いであることが考えられる。

高齢被害女性の自由意見には「私の年代では若い時にDVの知識が全くなかった」、「夫に従うとか女は我慢が当たり前のように育ったと思う。小さい頃から教える必要がありDV予防が社会に浸透していけば良いと思う」や、「DVや虐待があったとしてもその現象を定義する言葉さえなかった。言葉を得

たことは強烈で大人の考えが大切になると思う」などの意見が寄せられた。これらの記述からも被害女性は自分のケアと共に若い世代を守ることを念頭に置いていることが考えられる。

別居後1年以上が経過をしている被害女性の「現在の心身状態と心境」では「今、自分を大切に思う気持ち」も「周囲を大切に思う気持ち」も「ここ数年の自分の生活を満足に思う気持ち」も非被害女性と有意な差はみられなかった。この事から暴力から離れて別居したことにより女性たちは物事や考えの整理をすることが可能になったと考えられる。落着きを取り戻せば女性たちは前向きな気持ちが徐々に生まれてくるのであろう。

増井⁸⁾は「DV被害女性は離別を決意していく過程で<決定的底打ち実感>のプロセスを経て別居に至る。それ故、底打ちの限界ラインを押し広げれば被害の深刻化を防げるだろう」と論じている。限界ラインを押し広げるためには、内閣府の調査⁴⁾で高齢女性が回答をしていたような、「世間体が悪い。恥ずかしくて誰にも言えなかった。」というような考えを払拭するような社会を作っていくためにDV予防啓発が必要であると思われる。

「4. あなたの原家族（生まれた家族）はあなたにとってどのくらい温かい家族ですか」という質問に対して、被害女性は非被害女性と比べて有意に平均値得点が低かった。DV被害を受け、さらに原家族からの温かさも得られていないのであるならば、周囲や地域や相談機関での温かな支援が一層必要であると考えられる。

V. 本研究の限界と課題

本研究の高齢DV被害女性は都内3か所の相談機関で行った調査であり、さらに他地域での調査も必要である。

前段を受けて、高齢被害者がどのような援助を受けながら回復過程を歩んだかを調査することにより、支援策を提案するための一助とする。

VI. 結語

本研究から高齢女性は被害経験の有無に関らず、中学・高校生に予防啓発を行った方が良いと多くの方が思っていることが明らかとなった。

「DVに関する学習経験」では、被害女性は非被害女性と比べて、学習していることが示された。また「DVの特徴に関する理解」でも、被害女性は「DVは怒りで衝動的に起こるものではなく暴力という方法を選んでいる」と「DV加害者は暴力を振ったあと謝る事もあるが再び暴力を振ることが多い」で被害女性が有意に非被害女性と比べて高い認識をしていることが示された。

<謝辞>

研究に協力をしてくださった高齢者の皆様に、心から感謝を申し上げます。

VII. 参考文献

- 1) 内閣府男女共同参画局 HP : <http://www.gender.go.jp/>
- 2) 三隅佳子：アジアのドメスティック・バイオレンス. アジア女性交流・研究フォーラム, 篠崎正美 監訳/監修, 3-6, 2002
- 3) 内閣府男女共同参画局：配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律の概要. 2008
- 4) 内閣府男女共同参画局：男女間における暴力に関する調査報告書. 2012
- 5) Tobiasz AB, Brzyski P, Brzyski M: Health-related quality of life in older age and a risk of being a victim of domestic Violence. Archives of Gerontology and Geriatrics: in press.
- 6) 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環：中学生・高校生のDVについての知識と考え方の実態：アディクションと家族, 29(4), 244-251, 2014
- 7) 須賀朋子, 森田展彰, 斎藤環：中学生のためのDV予防教育プログラム開発と効果研究：思春期学, 31(4), 384-393, 2013
- 8) 増井香名子：DV被害者は、いかにして

暴力関係からの「脱却」を決意するのか
- 「決定的底打ち実感」に至るプロセス
と「生き続けている自己」. 社会福祉学
52(2),94-106,2011

連絡先：須賀朋子

〒 305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学総合研究棟 D

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 社会精神保健学分野

TEL : 029-853-3099

E-mail: s1230360@u.tsukuba.ac.jp

平成 25 年 12 月 20 日 受付

平成 26 年 3 月 27 日 採用決定